

## コロナショックと大阪・関西万博

新型コロナウイルスの感染拡大、パンデミック（世界的な大流行）は、全世界、日本、そして大阪の地を揺り動かしている。こんな状況のもとで、2025年大阪・関西万博をどう考えたらいいのか。

2025年日本国際博覧会協会のホームページを久しぶりに眺めてみた。万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」、サブテーマとして「いのちを救う いのちに力を与える いのちをつなぐ」を掲げ、コンセプトは写真のように「未来社会の実験場」である。

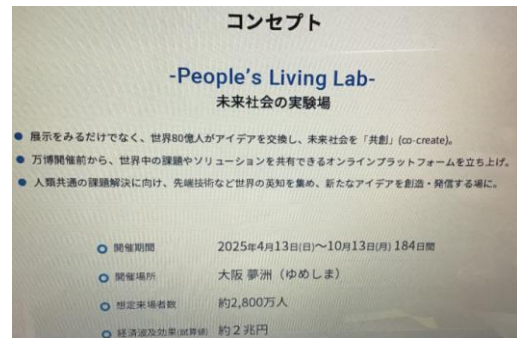
大阪・関西万博は2025年4月13日から10月13日までの184日間、大阪湾の人工島「夢洲」で開催される。想定入場者数は約2800万人である。どんな感じの万博なのかと、会場イメージのフライスルー動画というのを初めて見た。曲が流れて、次々に会場風景が映し出されていく。写真下は動画を撮ったので写りはよくないが、イメージはつかめると思う。

万博会場の動画を見ていて、コロナショックについて考えた。大勢の人が集まり、会場

を行き来している。1970年の大阪万博は「行列博」などとも呼ばれたが、人気パビリオンには順番を待つ人の行列ができるだろう。

コロナショックは経済社会に大きな影響をもたらしつつあるが、私たちの生活・行動スタイルにも変革を求めている。「3密」という言葉が流行語になり、密閉・密集・密接を避けることが、コロナウイルスの感染拡大防止に欠かせないとされる。世界的にも、「ソーシャルディスタンス」（社会的距離）をとって行動することが提唱されている。これは買い物などの日常生活だけでなく、オリンピックや万博といった国際的な大規模イベントのあり方にも大きな影響をあたえる。

夢洲という人工島で、半年間に想定入場者2800万人を集めて、「3密」を避け、ソーシャルディスタンスを確保して万博を開催できるだろうか。それは不可能に近い。パビリオンが並ぶ万博会場だけでなく、会場へのアクセスも大問題だ。世界各地から空路での移動、関空などから夢洲までのアクセス、国内各地から新幹線などでの移動、新大阪などから夢洲までのアクセスなど。とりわけ地下鉄「中央線」が夢洲まで延伸されたとしても、大混雑が懸念される。どうしても万博を開催したいのなら、開催方法と規模の抜本的見直し、会場の変更が不可避であろう。



(2020年5月24日)